

課題設定による先導的人文・社会科学研究推進事業（領域開拓プログラム）
公募型研究テーマ 研究概要

課題（研究領域）

規範理論と経験分析の対話

研究テーマ名

規範理論としての法語用論の開拓—ヘイト・スピーチの無効化をめぐる—

責任機関

国立大学法人北海道大学

研究実施期間

平成26年10月～平成29年9月

研究プロジェクトチームの体制

氏名	所属機関・部局・職名
研究代表者	
尾崎 一郎	北海道大学・大学院法学研究科・教授
分担者	
堀田 秀吾	明治大学・法学部・教授
郭 薇	北海道大学・大学院法学研究科・助教
李 楊	玉川大学・脳科学研究所・嘱託研究員

配分（予定）額

（単位：円）

平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度
3,857,000	3,391,000	2,748,000	1,741,000

※平成27年度・平成28年度・29年度については予定額

研究目的の概要

本研究は、いわゆるヘイト・スピーチの言語学的分析を通じて、その法規制の是非をめぐる規範理論と経験分析の有機的な架橋を行う。

民族的、人種的、性志向マイノリティ等に対するヘイト・スピーチの法規制をめぐっては、発話者の表現の自由とマイノリティの人権とのどちらを優先するのかという調停しがたい規範理論上の対立があり、あえて法規制を導入する正当化根拠として、ヘイト・スピーチがもたらす精神的・肉体的損害（苦痛）や社会秩序の混乱という経験的知見が挙げられるという構図になっている。この膠着した構図自体が、ヘイト・スピーチをめぐって「規範理論と経験分析の対話」が極めて困難であることを象徴的に示している。

そこで本研究では、言語学、とりわけ言語行為論や関係性理論等の語用論の最新の知見を取り入れながら、ヘイト・スピーチとして企図された言動がいかなる言語行為として、いかなるコンテキストで、誰により誰に対してどのように発話され応答されているか、そこではどのようなコミュニケーションが生まれ変容しているかを、詳細に分析することで、その言語的特質を明らかにし、得られた知見を基盤にして、〈意図された害悪としての認知+法による抑制+抑制の結果としての加害欲望の増幅〉という組み合わせの再生産というパラドキシカルな悪循環から社会が脱却し、ヘイト・スピーチなる言説の危害性を社会的に緩和、無効化する方途を探求する。

これは、経験的知見としての害悪の存在の検証と規範的主張としての法規制の法的根拠付けという二分法に伏在する経験分析と規範理論の分断を克服し、行為遂行としてのヘイト・スピーチに対する法規範による応答の新しい形を提案するものである。経験分析と規範理論の実効的な「対話」は、自然科学に範をとった経験分析の手法の一方的な洗練によっても、確定された経験的知見に対する規範理論の一方的迎合によっても十分には達成されない。特に後者が原理的困難を抱えていることはルーマンの社会システム理論によって明らかになっている。認知と規範実践を行為遂行的に兼ねる言語行為をまさにそのようなものとして把握し分析することが本研究では試みられる。

研究計画の概要

本研究では、現在日本社会において拡がりを見せている（人種、民族、性志向等のマイノリティに対する）ヘイト・スピーチの実例を広く収集し、その言語行為的、語用論的特性を精緻に分析することで、発話そのものの単なる抑制ではなく、その攻撃性、加害性を緩和し無効化する社会的・規範的応答メカニズムを明らかにする。

まず、実例として、マスメディアおよびインターネットの匿名掲示板等で外国人、在日コリアン、性志向マイノリティらに向けられ発信されているヘイト・スピーチを幅広く収集し、ヘイト・スピーチの拡散と対抗言説との交錯を、ヘイト・スピーチの発話者、攻撃対象、第三者の間のミクロな相互行為過程として定位し、発話者の意図と発話効果のズレ、攻撃性と攻撃誘発性の相乗的増幅、発話者の集団極性化といったプロセスのダイナミズムを詳細に明らかにする。

このような分析の知見をもとに、第1に、マスメディアやインターネット上の言論空間の制度設計上、いかなる工夫によってヘイト・スピーチの攻撃性を緩和・無効化できるか、第2に、そのような制度設計を実効化する上で、法規制はいかなる内実と手続を用意すべきであるか、第3に、威嚇や攻撃や排除を発語内行為として企図した言論の増幅と公権的言論統制との悪循環を断ち切る上で、私人はいかなる規範実践を実現できるか、について、実践的かつ具体的な提案をする。

既存の議論は、倫理学や法学といった規範理論とヘイト・スピーチのもたらす害悪の社会学的・経験的解明とは依然として異なる原理に属する学知として隔絶したままであり、自己完結的な論理に都合良く相手の知見を引用するに留まってしまっている。本研究はこの困難を乗り越えるべく、認知と規範を架橋するコミュニケーション・メディアとしての言語そのものに注目し、言語行為論や関係性理論のような発話と認知および理解のダイナミクスを解明することを試みる言語学諸理論の最新知見をふんだんに取り入れることにする。言語行為ないし言語コミュニケーションが本来的に、各種学問分野の自閉性（オートポイエーシス）を実践的に架橋する形で現に繰り広げられているということ直視する眼差しであり、新時代の学問がまさに求めるものである。